アメリカ文化特講 I (2)　　2024/4/9

I　“Wake” (航跡・通夜・覚醒)について

英文学者・黒人研究学者クリスティーナ・シャープ（Christina Sharpe）は、名著『奴隷制の余波（*In the Wake: On Blackness and Being*)』（2016）の中で、視覚文化、文学、ポストコロニアルの理論家から、黒人の生活の日常的な表象を例に取り出しています。本は 4 つのメタファー「the wake, the ship, the hold, the weather」（航跡、船、船倉、天候）に対応する 4 つの章に分かれており、シャープはこの 4 つのメタファーを通して、黒人の従属化の様式がディアスポラにおける黒人の生活にどのようにつきまとい続けているかを理論化しています。

シャープがあげる印象的な事例を見てみましょう。「船」の章はまず、1781 年に起こったイギリスの悪名高い奴隷船ゾング号事件（アフリカからの帰路、ジャマイカに寄港し損ねた Zong 号は水や食料不足の危機のなか、「積荷」442 人のうち、合計 132 人を海に「捨て」「処分」した。それは奴隷にかけられた保険を回収するためでもあった）を取り上げています。そして 2010 年のハイチ大地震の際、額に「船 (Ship)」と大きく書かれたテープを貼り付けられた負傷者の少女の写真、さらに 2013 年 10 月イタリアに向かう難民申請希望者を乗せた密航船が地中海のランペドゥーザ島沖で沈没し、（政治的な理由による）救助の遅れもあってアフリカからの難民 300 人以上が亡くなった出来事を取り上げます(類似した出来事はその後も起こっています)。18 世紀から 21 世紀、時代も場所も異なる複数の出来事ですが、シャープはそれらの出来事に、固有の名前と存在の尊厳を奪われ、十把一絡げに「(保険のかかった）積荷」や「(救助を必要とする）負傷者」「(厄介な）難民」と捉えられるアフリカ系の人々の（主体ではなく）客体とされてしまう位置付けを見ています。そして 2013 年の事件の犠牲者に対して向けられた同情についても、「帝国主義、植民地主義、民営化、鉱物・資源採掘、環境破壊など<u>彼らの</u>（同情するヨーロッパの人々の）犯罪」（57）をすり替えて見えなくしてしまっていることを鋭く批判しています。

ここに見られるような時間や空間を超えた構造的問題についての認識は近年ますます高まっています。アメリカにおいては BLM 運動の高まりが、日常を侵食する奴隷制の余波（wake）と言えるものについて、言い換えれば過去の出来事の航跡に巻き込まれる現在についての意識を先鋭にしたこともあるでしょう。シャープは上の事例で、過去の帝国主義や植民地主義が船の航跡のように現在の第三世界の搾取と人々の苦難につながっている様子を、時間や空間の制約を超えて描き出しますが、苦難と同時に、そのような状況に対抗する生の様式—まさに”wake”であること、通夜のように起きて見守り、状況に覚醒していること

―を捉えようとします。演劇もまた、1990 年代以降アメリカ史におけるアフリカ系アメリカ人の位置付けと存在のあり方を捉えようとする作品を生み出してきました。そして近年、奴隷制度の「余波」が侵食する現代を鋭く描く舞台作品が数多く生み出されています。

II　アフリカ系アメリカ人の演劇と奴隷制の余波

アフリカ系アメリカ人の演劇には長い歴史があります。もっとも早い時期の作品は元逃亡奴隷の小説家・(黒人初の) 劇作家ウィリアム・ウェルズ・ブラウン (William Wells Brown, 1814-1884) による『逃亡、ないし自由への跳躍（*The Escape; or, A Leap for Freedom*)』です。1858 年にボストンで出版され、北部各地の奴隷制反対集会などで朗読され賞賛されました。この作品は、苦難のなかでも自らの存在価値と自由を主張するアフリカ系アメリカ人の、状況に抵抗する強い意志と生の様式を表しています。

アメリカでの奴隷制は 1619 年から 1865 年まで続き、その後もジム・クロウ法と呼ばれる人種隔離に基づく差別的法体系は 1877 年から 1954 年まで、連邦最高裁判所が「隔離すれども平等」という原則を覆したときまで続きました。そのようななかでもアフリカ系アメリカ人の舞台での表現活動はさまざまな形で続けられ、20 世紀初頭にはブロードウェイで黒人ミュージカルが流行、1920 年代にはストレート・プレイでも黒人劇作家の作品がブロードウェイで上演され、ヒット作も生み出されるようになります。50 年代になるとアフリカ系アメリカ人の演劇は白人が求めるようなエキゾチックな黒人像でもなく、白人による抑圧に対するメロドラマ的批判でもない、新しい黒人像をより明確に提示するようになります。

ロレイン・ハンズベリ（Lorraine Hansberry, 1930-65）の『ひなたの干しぶどう（*A Raisin in the Sun*)』(1959）は、その良い例と言えるでしょう。シカゴの黒人地区サウスサイドを舞台とした家族劇で、黒人労働者階級の一家それぞれの夢の挫折と人間としての成長・尊厳とを描きました。この作品ではナイジェリアの独立闘争に関わる留学生を友人として登場させることによって、アメリカの公民権運動が暗黙のうちにアフリカの独立闘争と結びつけられ、家族の苦難がパン・アフリカ主義的視点から提示されています。『ひなたの干しぶどう』はブロードウェイでの 530 回にわたる公演でトニー賞 4 部門にノミネートされ、ニューヨーク劇評家協会賞に輝きました。1961 年にはシドニー・ポワチエ主演で映画化され、現在ではアメリカ演劇の古典とされています。

このようにアフリカ系アメリカ演劇には 150 年以上の歴史があり、数多くの優れた作品が生み出されてきましたが、1990 年代前後にアメリカ史をアフリカ系アメリカ人の視点から再審する先鋭な演劇が登場します。”Wake”の項で述べたように、固有の名前さえ残らず、その存在が抹消された人々の歴史を、それまでの主流の「アメリカ史」に抵抗して描きだそ

うとする試みがなされ始めたのです。

その先鞭をつけたのがオーガスト・ウィルソン（August Wilson, 1945-2005）です。ウィルソンは 1927 年のシカゴを舞台にブルースの母と呼ばれた歌手マ・レイニー（Ma Rainey, 1886-1939）のバンドマンたちの物語を描いた『マ・レイニーのブラック・ボトム（*Ma Rainey's Black Bottom*)』(1982）で鮮烈なブロードウェイ・デビューを果たしました。その後 1957 年のピッツバーグを舞台に、人種差別の壁のためにメジャー・リーグに入れず、才能を活かせなかった男を描いた『フェンス（*Fences*)』(1985）で、ピュリツァー劇作賞およびトニー賞を 1987 年に受賞。さらに 1990 年には、1936 年のピッツバーグを舞台に奴隷制時代の遺産であるピアノをめぐる家族の葛藤を描いた『ピアノ・レッスン（*The Piano Lesson*)』(1987）で、２度目のピュリツァー劇作賞（1990 年）を受賞し、名実ともにアメリカを代表する劇作家となりました。ウィルソンは 10 の連作で、生まれ育った街ペンシルベニア州ピッツバーグ市の黒人街ヒル地区を舞台に（『マ・レイニーのブラック・ボトム』のみはシカゴが舞台です)、この地で暮らすアフリカ系アメリカ人の人々がいかに 20 世紀を生きたか、10 年ごとに時代を変えて描き続けました。この連作を「ピッツバーグ･サイクル(Pittsburgh Cycle)」と呼びます。20 世紀の 100 年間、同じ土地で生きぬいた様々な人々を描いたこの連作は、アフリカ系の人々の 100 年の歴史を書く壮大な作業でもありました。

この授業では、20 世紀アメリカ演劇の金字塔と言えるこの連作から、1904 年を舞台にした『大洋の宝石（*Gem of the Ocean*)』(2003)と前述の『フェンス』を取り上げます。『大洋の宝石』では奴隷解放後アラバマに生まれ「シチズン」(Citizen＝市民）と名付けられた青年が、ピッツバーグで 200 歳を超えるというアント・エスター（Aunt Ester）と逃亡奴隷を助ける地下鉄道の元「車掌」だったソリー（Solly）に出会うことによって、自己の存在の核とも言える共同体とのつながりを見出します。劇の中核をなす船と航海のイメージは、ゾング号事件にもあるような中間航路における数えきれない人々の死を喚起します。けれどこの「wake=航跡」は、必ずしもネガティブなものだけではなく、シチズンを含む人々の拠って立つ根拠、すなわち「wake=見守り、覚醒」している状態の根拠ともなるのです。

アメリカ史を再審するもう一人の重要な劇作家はスーザン＝ロリ・パークス（Suzan-Lori Parks, 1963- ）です。ステレオタイプ化された様々な黒人の、繰り返された死の歴史を描く『全世界で最後のブラックマンの死（*The Death of the Last Black Man in the Whole Entire World*）』(1990)、リンカーンが象徴するアメリカ史と黒人との関係を描く『アメリカ・プレイ（*The America Play*）』(1994)、さらに 1810 年代にロンドンやパリで見世物にされたアフリカ人女性サラ・バートマンと彼女を対象化するコロニアルなまなざしを描く『ヴィーナス（*Venus*）』(1996）などは、欧米において抑圧されてきた黒人の歴史に切り込んでいく、パークス初期の特筆すべき作品です。『全世界で最後のブラックマンの死』で「スイカを持った男」と名付けられた人物は、歴史上繰り返された黒人の死を――リンチによる死や無実の罪による電気処刑も含む数々の死を遂げます。死のたびにコーラスが観客に訴えるのは、残虐極まりない死を「書き記せ」という言葉です。「書き記さなければ、我々が存在しなかったと未来に告げることになる」「岩に書き記すのだ」と。パークスもまたウィルソンとは違ったやり方で、アメリカ史のなかで抹消された存在を書き記していたのです。

この授業ではパークスの『ホワイト・ノイズ（White Noise）』(2019）を取り上げます。黒人の主人公が白人の親友との間に 40 日間の〈奴隷契約〉を結ぶことを申し出るという驚くべき設定で、現在を侵蝕する奴隷制時代の「wake（余波）」を描いています。この大卒エリートの主人公は散歩中に警官の暴力を受けたことでこの契約を思いつくのですが、黒人であることで道を歩く自由――いわば存在する自由――さえも否定されていることが及ぼす心理的影響と、奴隷契約によって生じた歪んだ権力関係が、白人と黒人の深層を蝕む様相が前景化されます。

存在する自由が否定された生―それはどのような生でしょうか。それはゲットーの路上で生きる二人の若者を主人公とするアントワネット・ヌワンドゥ（Antoinette Nwandu）の『パス・オーバー（*Pass Over*）』(2017）によって描かれています。警官や一見善人の白人による暴力に晒される二人の生活は、奴隷制がなくなった現在においてもその「余波」としての管理や暴力が人々の生活を規定していることを照らし出しています。

次週以降は具体的な作品に即して、演劇が過去と現在の関係をどのように再審しているかを考察していきましょう。

『大洋の宝石』、『パス・オーバー』、『ホワイト・ノイズ』のテクストは配布予定です。
『フェンス（Fences）』は購買会に発注してありますので、各自ご用意ください。